移動式夢空間

－まちづくり授業取組みの軌跡－

「未来へつなぐ日向（ひゅうが）のまちづくり」

中心市街地の魅力とにぎわいの再生を図るために、公民協働のまちづくりを基本理念として、日向地区連続立体交差事業・日向市駅周辺土地区画整理事業・特定商業集積整備事業などの関連事業に一体的に取り組んでいます。日向市では「木の文化のまちづくり」をテーマとして建物には地元の「木」が使われ、「木」で彩られた心地よいまちづくりが進められています。

木の駅舎

日向市駅舎は、まちの新たなシンボルとして位置づけられ、耳川流域産杉材を使用した木造大屋根が架けられます。

街なかの魅力とにぎわいづくり

中心市街地の魅力とにぎわいの再生を図るために、土地区画整理事業と併せた商業集積整備事業により、パティオ（中庭）形式等の商業施設整備が進められています。

木とまちづくり

街なかには、耳川流域の杉材を活かした街路灯やベンチなどが設置されています。これらは、木材関係者による「日向木の芽会」や地区商店主、子供たちによって大切にメンテナンスされています。

02

夢空間

「ふれあい富高小学校　日向（ひゅうが）市活性化塾」

連続立体交差事業等の日向市駅周辺のまちづくりでは、将来の日向市を担う次世代の子供たちに少しでも関心を持ってもらうことが大切でした。そして、子供たちが自ら夢を描き、その夢を実現するという過程を体験することによって、モノづくりを通した連帯感や造形感を養うと共に、子供たちから新鮮な発想を逆に返してもらうという相乗効果を期待したものでもあります。それは、まちづくり事業を推進していく上で大変意義深いものと考えられました。

前回（平成14年度）の課外授業も大きな反響を呼びましたが、今回はさらに内容を充実させ、子供たちがふるさと日向を再発見し、愛し、誇りを持つきっかけとなる事を目的として、日向市立富高小学校6年生3クラス（91名）を対象に、平成16年10月～平成17年1月の4ヶ月に渡り、総合学習の時間を使って「日向市活性化塾」として開催されました。

尚、この授業は、富高小学校、日向市及び「日向木の芽会」等の協力のもとに宮崎県の主催によって行われたものです。

まちづくり　～次の世代へつなぐもの～

「富高小学校まちづくり課外授業」（平成14年10月）は、篠原 修・内藤 廣（東京大学大学院教授）を講師に迎えて、次の世代の主役となる子供たちに、自分のまちについて考えてもらうために開催されました。

日向のまちは

「どこがいいのか？」

「残すべきものは？」

「足りないものは？」

自分たちで考え、その想いを模型にしました。

今、彼らが考えた「日向のまち」が設計に反映されようとしています。

まちづくり授業の課題

テーマ：杉でつくる「移動式夢空間」

駅前空間や祭り、イベントなどで、自分たちとまちの人達が一緒に楽しく過ごせる屋台を考えてみよう。

回	日時	内容
第1回	2004.10. 5	**準備学習1**　授業説明、まちの話
第2回	2004.10. 6	**準備学習2**　杉の現場見学（杉山、木材市場、製材所、サンドーム日向）、杉の話
第3回	2004.10.15	**講義（課題発表）＋実習1**　講師自己紹介、課題説明、グループごとの話し合い、意見だし、グループ案のまとめ（ラフ案）発表
第4回	2004.10.22	**実習2**　篠原先生、内藤先生のお話、模型作成
第5回	2004.11.12	**実習3**　モデル案の発表（各グループ）、グループ案をクラス案にまとめる、クラス案決定、設計図発表
第6回	2004.12. 9	**実習4**　実物製作1　クラス案模型プレゼン、フレームつくり、床張り、名前入れ
第7回	2005.01.13	**実習5**　実物製作2　発表会の企画案発表とディスカッション、屋台最終組立て
第8回	2005.01.28	**発表会**　下級生、保護者、市民を招待して、屋台の使い方実践
番外	2004.11.13	杉コレクション2004
	2005. 2. 6	欽ちゃん球団歓迎会での実践

南雲勝志先生へ

この手紙は、私達ふれあい富高小学校6年生のみんなが書いた手紙です。

私達、僕達6年生のみんなは、南雲先生が来ることを楽しみにしています。南雲先生が富高小学校にいらしたときは、みんなでおむかえしたいと思います。その日を楽しみに待っていてください。そしてその日までこのみんなからの手紙を読んで、みんなの気持ちを知ってください。これからもよろしくお願いします。

6年一同より

南雲先生からのお手紙で、日向市の未来に対しての「夢」というものが、より大きくふくらみました。
まだ会っていませんが、会った日から話せるようになれたらいいと思います。
(1組 Y.Kさん)

「なんでこうなんだろう?」「なぜ行きにくいんだろう?」など、困ることやふしぎなことがいっぱいあります。だからこの授業で自分やみんなにとって住みやすい、困ることのない日向市にしてゆきたいです。
(1組 T.Iさん)

人とたくさんふれあえる屋台、一度行ったら、また行きたくなるような屋台がいいと思います。
(1組 A.Mさん)

生産量だけでなく、使い方も日本一にして全国に知ってもらえるような日向市にしてゆきたいです!!
(1組 N.Nさん)

南雲さんは私たちより日向市のことを知らないのにどうしてそんなに案がうかぶんだろう、と思いました。
(2組 A.Sさん)

私は緑ゆたかで、町がいつもにぎわってるような、しょうがい者にもやさしいような町にしたいです。
(2組 M.Fさん)

建物を造るときに使われる木はヒノキや杉などがありますが、なぜ杉が良いのですか?
宮崎が杉の生産が多いからですか?
(1組T.Sさん)

地球の自然を守りながら「杉」を使って今よりももっともっと輝く日向を作ってゆきたいです。
(1組 M.Iさん)

お手紙で宮崎県が一番杉の生産が多いと書いてあってびっくりしました。多分、お父さんもお母さんも知らないと思います。
(3組 N.Kさん)

ぼくは、いつも街の店のシャッターがほとんどしまっているので店をもっとふやしたいと思っていました。
(3組 K.Tさん)

私は日向市のまちをいつも変えたいと思っていました。
日向市をもっと安全で住みよいまちにしてゆきたいです。
(3組 C.Fさん)

日本にいるんだから、日本の木材を少しでも入れて、杉の木をもっと使える町にしてゆき、さかんな人が集まる日向市にしてゆきたいです。
(3組 T.Nさん)

私は、日向市がどんどん変わってゆく姿を見て「これは大人だけが考えればいいことだ」と思っていました。
でも、この手紙をよんで見て、「未来を担う私達も考えないといけないんだな」と思いました。
(2組 A.Kさん)

最初南雲先生の名前を聞いた時にだれだという気持ちがありました。
けれどビデオや話を見たり聞いたりしている内に、日向のことを大切に思ってくれている人なんだなと思い、会って見たいという気持ちがとても大きくなりました。
(2組 K.Tさん)

杉を積極的に使ってゆくことはいいことだと思いました。
でも、使いすぎてもいけないと思いました。環境問題のことをよくかんがえ杉を使ってゆくのがいいと南雲先生も思ってると思います。
(2組 R.Hさん)

私はこれからの授業は、できる限りみんなの意見を取り入れて、すてきな「動く夢空間」を作れるよう、先生の話をしっかり聞き、関心を持ち、それを生かしていけるような活動にしてゆきたいと思います。
(2組 S.Iさん)

ふれあい富高小学校の 6 年生の皆さんへ

ふれあい富高小学校の 6 年生の皆さん、こんにちは。そして初めまして。デザイナーの南雲勝志といいます。
このたび皆さんの課外授業を担当することになりました。どうぞよろしくお願いします。

一昨年、当時 6 年生だった、皆さんの先輩が、東京大学の篠原修教授、内藤廣教授に課外授業を受けたことは、すでに知っていると思います。これからの自分たちのまちをどうしていこうか？大人たちだけではなく、未来のまちを担う子供たちが一緒になって考えることがとても大事だというところからスタートしています。これは日本全国であまり例のないとてもすばらしい企画です。それを 1 回で終わるのではなく、これからも続けていきたいと県や市の関係者、そして先生が願っていました。その想いは実現し、今年また行えることになりました。そんなたくさんの大人たちがまわりにいることに感謝しましょう。

さて、今年の課外授業の内容ですが、なんと全 8 回と、授業の回数をずいぶん増やしてもらいました。皆さんと私たちが一緒にじっくりと考え、悩み、学んでいく時間が十分あるわけです。私たちと書きましたが、91 人の皆さんと熱い授業をするには、仲間が必要だと考えました。まず、日向木の芽会の海野洋光さん。日向や周辺の木材の事、その問題点や可能性をとても良く知っている方です。そしてあと二人。内田洋行という会社のデザイナー、若杉浩一さんと千代田健一さんです。お二人は九州出身で、とても気さくで明るい方です。デザインや、杉の未来についていつも一緒に考えている仲間です。

そうそう、杉といえば、課外授業の内容のことについてふれておきます。今年も将来のまちを語ってもらいますが、それに「杉」というキーワードを加えました。なぜ、杉か？皆さんも知っているかも知れませんが、宮崎県は日本一杉の生産が多い県です。日向のまちづくりでも杉を積極的に使っています。生産するだけでなく、自分たちの生活のなかで、それを上手く使っていくことが、これからとても重要だと考えているからです。

昭和 40 年頃までは、杉は日本の家やまちをつくる中心の材料でした。その後、高度成長期を経て、安く買える木が大量に輸入され、日本の木材は高くてあまり使われなくなってしまったのです。その代表が杉です。でも今は少し様子が変わってきました。木材は貴重な地球資源で、特定の地域の人が自分たちのためだけに使ってはいけないし、しっかり保存していくことも大事だと考えるようになってきました。でもまだまだ杉はあまり上手く、広く使われていません。どうしてでしょうか？

私たちの祖先が大切に守ってきた杉。経済の都合で取り残されてしまった杉、それとこれからどう付き合っていくか？そしてこれから日向市がどんなまちになったらいいか？その二つを一緒に考えるところから皆さんの夢に繋げていかないか？ということが今回の大きなテーマです。

では具体的に何をやってもらうかですが、皆さんは屋台を知っていますよね。ラーメンやおでんの屋台は見たことがあると思います。今回は今までにない自由な発想で杉の屋台を考えてもらいたいのです。それはまちなか、祭り、学校のイベントなどこにでも持って行くことが出来ます。自分たちの想いや夢を語り、そこから子供からお年寄りまでみんなで一緒に使え、楽しめる屋台をつくってみましょう。題して「移動式夢空間」と名付けました。

たくさんのすばらしいアイディアが生まれることを今から期待しています。その中のいくつかは海野さん達に実際に製作してもらおうと思っています。夢は実現していくものだということ、そして皆さんの考えを全国のたくさんの人たちに知ってもらいたいからです。宮崎県は生産だけでなく、使い方も日本一だと言われるようになったらどんなに素敵でしょう。
それでは皆さん、第 3 回に会うまでに、イメージを膨らませておいて下さい。一緒に最後まで頑張っていきましょう！

2004 年 9 月 30 日　講師代表 南雲勝志

平成16年の10月。
初夏から半年間、
県、市、学校と南雲さんで
準備を進めてきた。
「日本中
どこもやっていない授業」
がスタートしました。

第1回
2004.10.5
授業説明・まちの話

「あなたたちの夢を実現するため、東京からプロのデザイナーの方々に来ていただきます。」

この時点で子供たちは、これから始まる授業が何をするのか少しピンときていないところもあったようだが、「デザイナー」という新鮮な言葉の響きに、おもしろいことがはじまりそうな予感を抱いているようだった。

まちの話

県と市の方から、現在中心市街地で進めているまちづくりについて、スライドや模型を用いて説明。

子供たちは、普段何げなく毎日のように歩いている街中で、まちづくりの状況を知り、これからの授業で、まちづくりに自分たちも関われる・・・

そんな喜びみたいなものを感じ始めているようだった。

「耳川流域産杉材を大屋根に使って新しい駅舎を作る計画です。」(県)

新駅舎模型の周囲に群がる子ども達

「鉄道高架のこと、少しはわかったかな?」(県)

「駅前の新しい街や塩見橋にある木の街灯

できるまでこんな試行錯誤を繰り返してきたんです。デザインした人はこの人、南雲さん、作るのを頑張ったのは、日向木の芽会のみなさんです。」(市)

交流のはじまり

最後に、子ども達に紹介された南雲さんの長い手紙。

南雲さんが書いた、先輩達の課外授業のことが載っている本も贈られた。

本を、グループ毎に輪になって、ページをめくりながら

「これ、かわいい〜!」

会う前から、ナグモワールドの虜に。

第2回
2004.10.6
杉の現場見学・杉の話

第2回の授業では日向での林業・製材業の実態を学習。

天気にも恵まれ、バス2台で出発。

遠足と違い、バスの中でも木に関するビデオ鑑賞をしながら移動。

杉山にて

「これが杉です。三十五年経っています。

間をすかせて　太陽の光が地面に届かないと大きくなりません。

ツル等が、登れないように下枝を切るんです。」

杉山の傾斜地に入り込み表皮にさわり、匂いをかぎ、落ちている枝を持ち帰る。

製材所にて

轟音をたてながら丸太を切っていく迫力に圧倒される。

「日本の木材は、18%が国産材、82%は外国から・・・。」(海野さん力説)

木材市場にて

競りの様子を間近で見学する子供たち。

何が起こっているのかわかっていないようだ。

競りの後で、やりとりされていたことを通訳してもらい「へーー」と納得!

サンドーム日向にて

「屋根を見上げてください。

杉でもこんな大きな施設ができました。

新しい杉の使い方、集成材といいます。」

「南極の氷が溶けると・・・」

杉枠で作られた手作り紙芝居で更に知識を深めた。

第3回

2004.10.15

グループごとのアイデアだし

講師登場！
～オリエンテーション

第3回目の授業からいよいよ移動式夢空間の製作実習に入る。

南雲勝志さん、若杉浩一さん、千代田健一さんの講師陣が生徒たちの待つ体育館へ入場。圧倒的なパワーで出迎えるふれあい富高小6年生一同。何という歓迎！

まずは講師代表の南雲勝志さんから今回の課題の説明を受ける。「地場の杉材を使って自分たちの夢空間を作り、実際に街で使ってみよう！」

自分たちの夢を実現するための共同作業がスタート！

15の夢の始まり

まずは各クラス5グループに分かれ、15のグループ案を作成。今回の課題は大きさの制限が設定されており、その大きさを体感するところから始めた。やりたいことを言葉や絵にしてゆく子供たち。ガムテープを床に貼り付け大きさを確認するもなかなかイメージがつかめない。すると子供たちは体育館にある跳び箱や平均台などを持ち出し、アイデアをあっと言う間に具体化してゆく。

ふれあいタイム

学校側の計らいで、講師と生徒たちが触れ合う時間が設けられた。恥ずかしそうにしながらも近寄ってゆく男子たち。一気に講師を取り囲んでしまう元気な女子たち。ほどなく、体育館はサイン会場になって大賑わい。仲良くなるきっかけ作りは子供たちの方が上手なようだ。

無我夢中の子供たち
～プレゼンテーション

アイデアが出たらそれを絵や文章にまとめ、発表できるように仕上げてゆく。中には立体的に寸法まで入れた図面仕立ての絵を描いているグループもある。それぞれの子供たちがあっと言う間に各自の役割を持ち、見事なコラボレーションが成立している。

その表現の多彩さもさることながら、街に対する想い、お年寄りや小さな子供への思いやり…実に良く考えており、大人たちを驚かせる。出揃った15の夢。才能の宝庫、開花する。

授業の裏側

子どもと講師と教師が一体となった授業を構築したい…という思いが、講師の方々と初めて会って「移動式夢空間」と命名し、熱い握手をした時にビリビリと伝わり、「できる！」と感じた。子どもとのやりとりを見ていても目の高さ、ことば、どれをとっても実現できると痛感した。

（6年1組 川崎先生）

第4回

2004.10.22

模型作成

夢を形にする

第4回目の授業は、前回絵としてまとめたアイデアを元に、各グループで模型製作を行う。

授業の冒頭では、2年前課外授業の講師を務められた東京大学の篠原修先生、内藤廣先生が子供たちを激励。そんな偉い先生方にもサイン攻めをする。無邪気で人懐っこい子供たちはあっと言う間に大人の懐へ飛び込んで行く。

模型の材料も日向木の芽会さんの協力で、杉材で揃えることができた。今回は計算がしやすいように10分の1のスケールで作る。

形にする難しさ

慣れない作業に戸惑う子供たち。のこぎりやカッターナイフの使い方もままならない。接着剤として用意したホットボンドにも悪戦苦闘。休憩も取らずにひたすら作り続けるもなかなかうまくいかない。子供たちの顔から少し笑顔が消えていた。

子供たちは今まで経験したことの無いモノを加工するために必要な「技術」というものに出会い、表現することの難しさを学ぶ。

遠のく夢…

授業その後 先生と子供たちの頑張り

子ども達にとって、最大の難関は慣れない工作道具の使い方。しかし、そんな中で仲間同士の教え合いが生まれ、授業後も昼休みの時間を使って、一心に製作に没頭する子ども達の姿に、ものづくりの持つ魅力を感じました。

（6年2組 江藤先生）

打ち合わせの中で全体像が見えてくると、今度は本当にできるのかなあ、と心配になってきました。が、子ども達は反対にやる気満々で、自分達の夢空間向けて、どんどん突き進んで行き、私は後を追っかける感じでした。

（6年3組 黒木先生）

授業の裏側

材料調達裏話

（海野さんより）

Q 今回使用した杉は日向のどの辺りの山の杉なんですか？

A「地元耳川流域の飫肥杉です。木の色もよくやわらかな優しい感じの杉です。」

Q 何年くらい経った杉なんでしょう。

A「40～45年生を使っていますね。」

Q 3クラス分でどのくらい使用してますか？

A「1立方メートル～1.5立方メートルぐらいですね。」

第5回

2004.11.12

グループ案・クラス案のプレゼンテーション

15の夢　模型完成！

第5回目の授業は、苦労の末、出来上がった模型を使って各グループ案のプレゼンテーション大会を実施。前回の授業では完成にまで至らなかった模型を子供たちはクラスの先生と共に考え、見事に完成させていた。

体育館に並べられた模型たちには、みんなの夢が愛情あふれんばかりに表現されていた。苦労に苦労を重ねやり遂げた満足感からか、各グループのプレゼンテーションはそんな自信に満ちた堂々たるものだった。「どうだ、先生たち！」良く見るととても細かいところにまで気を使ってあり、子供たちのこだわりが良く伝わってくる。夢が再び見えて来た。

15の夢を3つの大きな夢へ

グループで出したアイデアを今度はクラス案としてまとめてゆく。子供たちと先生方の頑張りで、既にクラスとしての案はまとめられていた。この短い期間で各グループの案をまとめ、とてもわかりやすいプレゼンテーションをしてくれた。クラスが一体となった発表に講師陣も感動を禁じえないようであった。

小さな夢の集まりが大きな夢へと広がってゆく。子供たちはできるだけみんなの思いを少しずつでも取り入れようと努力したようだ。

仲間への思いやりが伝わってきた。

授業の裏側

大人たちへの挑戦〜設計・最終確認模型製作

みんなの夢がつまったスケッチを手にして、気を引き締め直す講師陣。子供たちのアイデアを実際造れるかたちに設計してゆかねばならない。ここからがプロのデザイナーの腕の見せ所。講師間でスケッチや図面のやり取りをするためにおびただしい数のメール、電話が飛び交う。

このやり取りの最中、南雲先生からそれぞれの夢空間に素晴らしいテーマが与えられた。

少し全体の事を考えています。クラス案はそれぞれすばらしいと思いますが、6年生全体でどう表現したらいいか。

一組はタカラバコです。色んなものを収納し、そこでいろいろなものが生まれてきそうです。

二組は夢の駄菓子屋です。これはなんといっても楽しい。

三組は夢の移動図書館。これは学んでいく空間です。

そこでキャッチフレーズとして一組は創の空間、二組は遊の空間、三組は知の空間なんでどうでしょうか？

これはどれも子供たちにとって不可欠なものです。（もちろん大人たちも）そして三つの形もそれぞれ四角、三角、丸と特徴的なカタチを出せたらと思っています。

そんなやり取りを繰り返しようやく実物の製作に入ることができた。

さらにプロチームは最終確認のためプロの手による模型を製作することに…

第6回

2004.12.9

実物製作 1

プロフェッショナルの仕事

第6回目の授業では、まずプロによって作られた最終確認用模型を子供たちに披露。もったいぶって箱に入れたままの状態で授業開始の挨拶をする講師陣。子供たちはそわそわして早く模型を見たい！という目で訴えている。

取り出す間、子供たちには目を閉じてもらい、一斉に公開！「おおーーーー！」というどよめきが教室一杯に広がる。講師からひとつずつ設計の要件を満たしているか確認を取ってゆく。引出しや扉、ひさしを動かすたびに湧き上がる歓声。巧みに製作された模型を前に驚き、そしてとても満足そうな笑顔を持ってプロの設計を承認したようだ。

「私達、僕達の夢がまた一歩現実に近づいた！」

内田洋行のスタッフ有志が集まり、完成させた模型。

骨組み

満を持して日向木の芽会、海野さん、藤永さんの登場！

いよいよ実物の製作に入る。まずは基本的な骨組みの組立てから。技術を要する箇所は予め藤永さんが組立て済みで、底板の貼り付けや柱を立てる作業を子供たちで行う。金槌の使い方もどこか危なげだが、子供たちは自然と自分の役割を把握し、造り方を覚えていった。みんなで行う作業は難しくても、とても楽しいようで、みんなの表情が生き生きとしている。日向市や県の職員も子供たちを応援、指導に当たる。

底板の裏側には製作記念として各自の名前と将来の夢などを書いて、打ち付けていった。ちょっとしたタイムカプセルだ。

出来上がった骨格を前にはしゃぐ子供、大人たち。夢の実現に向けて一体となった仲間達。その表情はどこか誇らしげで自分達が作ったものへの愛情に満ち溢れていた。

第7回

2005.1.13

実物製作2

下準備

前回、骨組みを組上げた後、藤永木工所ではその骨組みに取り付ける棚や扉、ひさし、天板といったものの製作が進められていた。ここからの仕事は正に藤永さんの得意分野。通常の仕事そっちのけで製作に没頭。その出来栄えは見事！の一言。子供たちに見せる前に実物を見た大人たちは大騒ぎだった。

仕上げ

骨組みの状態からどう変わったのか、子供たちは全く知らない。校舎の外には青いビニールシートで隠された夢空間が並んでいて、これを南雲先生が子供たちと一緒にひとつひとつシートを取っていった。ひとつ除幕されるごとに湧き上がる歓声。自分達がデザインしたものがとうとう現実に使えるものになろうとしている。

今回の作業は、まだ仮止めしてある側板や引出しの底板の釘打ちとやすりがけ。こういった大工作業をしている時が一番楽しそうだ。

イベント企画

次に最終日の発表会でのイベントアイデアを各クラスの代表者が発表。

1組―創の空間

杉を使ったしおり、キーホルダー、写真立てをお客さん自身で作ってもらう参加型工房。

2組―遊の空間

イベントのチケットショップ、杉グッズの販売。

3組―学の空間

移動図書館、ゲーム、手品、紙芝居。

3つの夢空間が連携して一体感のあるイベントになるような仕掛けになっている。

その他、チケットは折り紙にして買った人に折鶴を折ってもらい、商品と引き換えるという素敵なアイデアが採用された。さらに素晴らしいのはこの折鶴を新潟県中越地震の被災者の方へのお見舞いに送るという発想を子供たちが考え出したことだ。販売する商品を宮崎県の誇る杉材で作ったり、お見舞いを考えたり、子供たちはこの授業の本質をちゃんと理解している。

3つの大きな夢がさらに大きな1つの夢に繋がってゆこうとしていた。

授業の裏側

南雲さんの悪巧み？

南雲さんのいたずらで若杉さん、千代田さんは仕事の都合で欠席ということに…。ビニールシートで包まれた完成間近の夢空間に潜んでいて、突然現れてみんなを驚かせてやろうという仕掛け。この演出はうまく行き、校長先生ですらびっくり。子供たちも「はめられた！」と悔しがる。何事も洒落を忘れないのがスギダラ軍団。

藤永木工所の皆さん

授業当日の早朝、藤永さんの木工所から通学中の生徒達に見つからないようこそこそと夢空間たちを学校に運びこんだ。藤永さんと職人のみなさんは、出すのが寂しい、寂しいと漏らしていた。

第8回

2005.1.28

発表会

ついにやってきた最終回

最終日のプログラムは午前中に1年生を招いてのリハーサル。午後は父兄や地域の皆さんをご招待しての店開き、本番だ。

朝からみんなで夢空間の飾り付けをする。のぼりや看板の取り付け、商品の陳列、その他のイベント道具をみんなで協力して手際よく進めていった。どの子も自分の役割を知り、自発的に動いて行く。飾り付けが進むにつれて、それぞれの夢空間が生き生きと楽しげになってゆき、お客様をお迎えするに相応しい設えが整い始めた。

リハーサル～夢を共有した1年生

お客さんを迎える準備が整い、まずは1年生を招いての練習。期待に胸を膨らませた1年生が登場した。夢空間でしか使えない硬貨「100夢」を手に持ち、夢を買う小さな1年生。さすがに6年生のお兄さん、お姉さん、1年生にやさしく教えたりきっちり面倒を見ている。6年生が作った夢空間を通じて、1年生も今までに無い夢を体験。

子供たちが自分達のまちに、こうあって欲しいと思い描いた夢が今ここに実現した。

発表会本番！

午後からは保護者の皆さんや近隣の住民の方を招いての発表会。子供たちが用意したイベント会場の熱気ある雰囲気に、大の大人が夢中になって楽しんでいた。ショッピングや工作を楽しんだり、中にはむきになって子供とのゲームに熱中している保護者の方も・・・もう、会場は普通に街中でやっているフリーマーケットの会場のように溢れんばかりの人で賑わっていた。子供たちの接客応対も様になっており、とても立派だ。

新潟中越地震の被災者の方々へ贈る募金集めも大きな声で元気良く回っていたので、来場者の皆さんもたくさん募金協力してくれたようだ。

夢が現実へ・・・大人、子供、関係無く一体化した空間。立派に成長した子供たちに。そして、子供たちに多くのことを教えてもらった大人たち。参加してくれた保護者、来場者の方々はそう感じたことだろう。

涙の修了式

とうとうお別れの時がやって来た。できれば、このまま終わらないで欲しいと皆願っていたことだろう。子供たちが講師陣やこの授業を支援し続けてくれた人々に感謝の言葉を読み上げた。最初の頃から比べると、とても立派になった。この授業を通じて確かに成長したのだ。

特に伝わってきたのが、感謝の気持ち。自分たちだけの力ではなく、多くの人に支えられて実現できたことを心の底から感謝していた。

講師からの最後の言葉は、胸一杯でとても言葉になっていなかった。

頑張って夢を実現できた証として、南雲先生が主宰する日本全国スギダラケ倶楽部の会員証が修了証として全員に授与された。

最後に校長先生からやさしい一言が・・・「みなさんは今日からスギダラケ倶楽部の会員になりました。切ろうとしても切れない大きな絆ができました。」

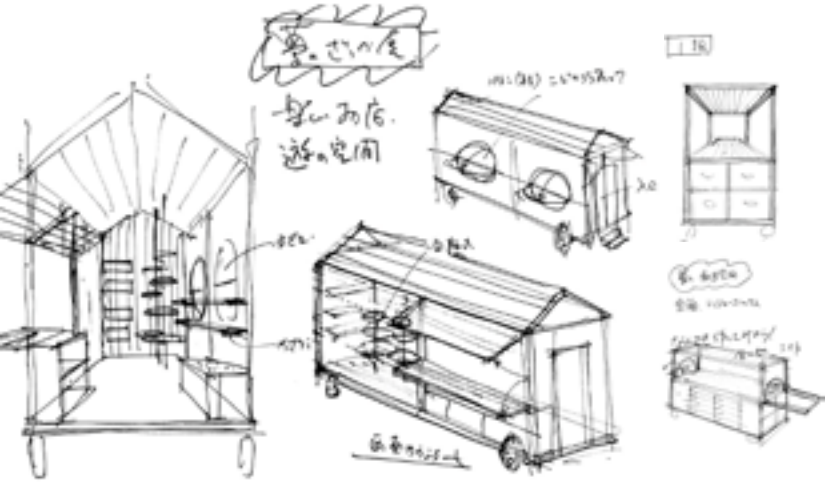
この夢の実現を果たした時間を共有してきたみんなはとても大きな絆で結ばれているのだ。ものの在り方、そして関わり方の未来がここにある、と誰もが確信した。

ところがこれで終わりではなかった。最後の最後に子供たちが素晴らしい歌を聞かせてくれた。昨年の音楽発表会で歌った「この星に生まれて」の合唱を・・・それまで堪えていた涙が・・・大人たちも、子供たちも・・・

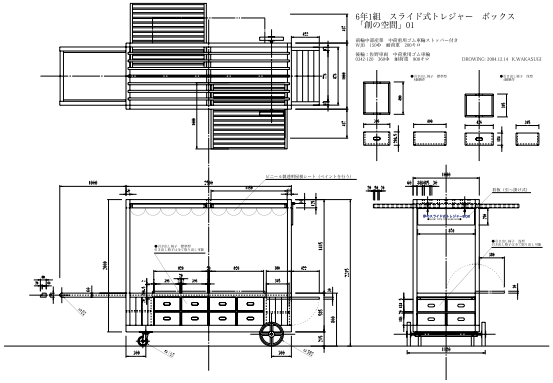
こうして、夢を共有してきた日向市活性化塾の幕が閉じた。

05 かたちになった夢

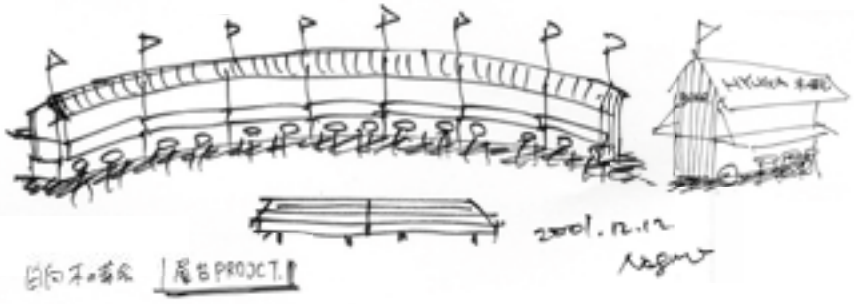
第1回から第8回まで、その課程の中で、
夢は確実にかたちになっていきました。
児童も、教師も、講師も、
そして関わったすべての人たちが力を合わせた成果が、
すばらしい夢空間となったのです。



各クラスの検討時に書かれたスケッチ。
南雲さんの提案により、各クラスの「創」、「遊」、「学」のテーマが決定し、形もそれぞれ特長付けられた。



スケッチを元に作成された設計図。細部のディティールまで書き込まれている。



今回のまちづくり授業が始まる前2001年に南雲さんが立案していた屋台プロジェクト。夢はここから始まっていた。

創

6年1組

6年1組のテーマは「創」の空間／トレジャーボックス。
たくさんの引き出しがスツールに変わり、周りに広場が生まれます。

遊

6年2組

6年2組のテーマは「遊」の空間／動くレインボーランド。
雑貨や駄菓子などを、回転式の台に陳列できるようになっています。

学

6年3組

6年3組のテーマは「学」の空間／夢の図書館。
紙芝居の窓や読書、ゲームのためのテーブルがあります。

撮影／村角創一

06 関係者のコメント

東京大学大学院　篠原修　教授

普段、算数で計算したり、国語で作文を書いたり、理科の実験をしたり、それもおもしろいけれど、実際にこういうものをつくるほうがずっとおもしろかったんじゃないかな？　企画を考えて、みんなで議論して、すごくおもしろかったでしょうね。

普通は、模型の製作くらいで終わりでしょうけど、さきほど実物を見てびっくりしました。あれだったらぼくも乗れるかな…。お祭りのときにもってきてもらって、ここでおでんを食べさせてもらいたいですね。

自分がつくったもの、もちろん覚えているよね？

みんなが卒業して、あと2年後くらいにまちが完成したとき、これをもっていって、またその時に会いましょう。諸君にはまだちょっと難しいと思いますが、本の屋台もあるので、先生が1冊本を寄付していきます。頑張りましたね。（拍手）

東京大学大学院　内藤廣　教授

富高小学校の小学生諸君。たいへんな熱意とエネルギー、すごいと思いました。それをうまくいい結果に導いた先生方の熱意もすばらしいと思います。

まちづくりというのは、いろんな人が協働してひとつの目標に向かってものをつくるというのが基本です。今回の模型製作で皆さんがやったことは、まさにまちづくりそのものだと思います。皆さんが日向市を担っていく世代になったとき、同じように協力しあって、みんなのまちができることを願っています。

今の熱意、純粋な気持ち、それを忘れずに大人になってください。大人になるとだんだんそういうものを忘れて、自分勝手に自分の利益だけを考える人がでてきますが、皆さんが今の気持ちを忘れなければ、日向市はすばらしいまちになると思います。

6年1組　川崎孝志　先生

ふるさとを愛する心を育てることを目標にこのプロジェクトは立ち上がった。まちを活性化させる手段として考えたのが、その名も「移動式夢空間」。教師も子どももこの活動に夢を持ちつつ、不安もあった。が、力の限り挑んだ。何も無いところからスタートし、グループ案、模型作り。そしてクラス案。今までやったことも無いような発表や説明…そして活動。たくさんの難関を乗り越え、自分達の力で夢が現実に…なんて素敵な体験ができるのだろうと羨ましく感じた。あらゆることに関心を持ち、感動し、そしてたくさんの方の協力に気づき、感謝する。だから実現できた！

フィナーレは言うまでも無く、笑顔、感動で満ちあふれていた。この活動で身に付いた力は星の数くらいある。教師も講師も子ども達と一体となって、夢に向って突き進む。これが教育の原点なのでは…と痛感するとともにかけがえのない宝をプレゼントしてくれた子ども達に感謝！

6年2組　江藤英俊　先生

ものづくりをテーマにした総合的な学習の時間。私は杉という素材がこのようなすばらしい教材になるとは正直、想像もしていませんでした。「僕は、木を切ることが全て環境破壊だと思ってました。」と話していたA君。「4mって意外と長いね。」と体で空間をとらえていたBさん。「将来、大工さんになりたい。」と日記に書いてきたC君。どこにでもある杉が、子ども達に様々な知識とスキル、そして夢を運んできてくれました。のこぎりをうまく使えない子ども。両手でかなづちを使おうとする子ども。今の子ども達は昔の子と比べて本当に変わったのでしょうか？

私は、今の子ども達はそれらを「学ぶチャンス」が無かっただけだと感じました。多くの方々の協力のもと、「学ぶチャンス」を得ることができたことは、子ども達の人生を後押しするものだと確信しています。

6年3組　黒木博美　先生

学校で行う授業とは全く違うスタイルで、人・時間・空間の壁を越えて、子ども達の自由な発想や夢を表現できる場だったと思います。

3組は、誰を対象にし、どんなことをして喜んでもらうのか、という問いかけから出発しました。5つのグループそれぞれが見事に答えを出してくれました。クラス案として一つにまとめなければならない中で、あきらめなければならないものも出てきました。きっとつらかっただろうと思います。生き物が大好きな子が水槽を考えたり、父親の仕事を見↘

↘てる子が盆栽を考えたり、いろいろな想いがあって出てきたことを、もっと時間があれば実現させられたなあ、と反省しています。

子供たちや私にとってこの授業はいつまでも心に残る大切な思い出であり、貴重な経験でもありました。

日向木の芽会　海野洋光さん

日向木の芽会は、杉という地元の素材を児童に知ってもらえればという軽い気持ちで臨みました。

結果は想像以上のもので、杉の可能性を想像力豊かに表現してもらい、新しいまちづくりのヒントをたくさんもらうことができました。3人の講師から頂いた成功のポイントは、妥協のない本物を作ることでした。

今回の授業が特別なものではなく、ごく当たり前な教育のシステムになることを強く望みます。「自分の生き方のベースになった」と子どもたちに言われる授業にしていきたいですね。

日向木の芽会　藤永浩二さん

当初は、リヤカーに乗ったおでんの屋台を想像していましたが、いざ、図面が渡されてみるとあなたたちの発想に、びっくり仰天、驚き、桃の木、杉の木でした。

私達にとっても初めての仕事で、わくわくしながら製作していき、次第に楽しくなり、本業そっちのけに無我夢中で思わず地上の星を唄いながら一生懸命でした。どんどん形になっていく過程で愛着が湧き、工場から出したくない気持ちでいっぱいでした。

この夢空間の仕事をさせていただき、充実感と感謝の想いでいっぱいです。大変よい勉強をさせてもらい、本当にありがとうございました。

保護者からのことば

子供たちが、この4ヶ月間とても楽しみにしていた課外授業もついに終わってしまいました。始めたころはイマイチ動きもにぶく、こんなんで完成までいけるのか…と心配してみていました。「どうやったらいいのか？」「なにしたらいいの」と、自分から始めることができなかった子供たちが、先日の参観日にいってみると、見違えるように変わっていました。この授業を通して「自分から何かをする」ということを学んだのでしょう…ね。

子供たちにとってこの授業はどんな「成果」を残したのでしょう？

子供たちひとりひとり聞いてみたいものです。

講師座談会

南雲勝志×若杉浩一×千代田健一
楽しむことから始まるこれからのまちづくり

聞き手・構成/
長町美和子(フリーライター)

――課外授業を終えて、この熱気は何だったのか、と関係者の誰もが考えたと思うんです。行政も学校もデザイナーも地元の木材関連業者も、みんなそれぞれに目的があって得るところも大きかった。でも、負担も結構大変だったじゃないですか。それでも突き進んで行けたのは、何だったんだろう、って。きっと深いところに意義があったからと思うんですよね。

南雲◆僕は、これはスギダラ(*1)の活動の一環と考えると説明しやすいと思う。授業にどう取り組んだかというより、杉と人がどう関わっていくかを改めて再確認した、って感じがする。

若杉◆そうですね。スギダラのプロダクトって製品になりにくいでしょう？どこに価値があるのかわかりにくいし、メンテナンスもやっかいだし。でも今回、産地や地域の人と接して、ネットワークやコミュニティができればスギダラプロダクツも存在し得る、と確信しましたね。それから、子どもたちを通じて、将来もこういったモノづくりのあり方が理解されるだろうという可能性が確認できたのは、我々企業デザイナーにとっては非常に価値のあることだったと思ってます。

千代田◆僕としては、今回「日向木の芽会」の人たちに会って、こんなに強い思いを抱いて杉に関わっている人がいる、って知ったことも大きな収穫でしたけど、彼らと一緒に「杉コレ」をやって、一気に全国に仲間が増えてきた、ってのがうれしいですね。

南雲◆それを結びつけているのが杉なんだよ。素材としてどうかということよりも、人をつなげる力を持っている。それこそ杉の可能性だと思うんだ。

若杉◆今、メンテナンスフリーで誰がつくったかわかんない、安全で安心で便利っていうシロモノばかりじゃないですか。そんな中で消費者と生産者との関わりがなくなってきちゃっているけど、今回、やっぱりモノづくりの背景が見えることが必要だと痛感しました。お互いを理解して覚悟を決めてやらないと、こういうモノって生まれない。世の中がそうなってくれば、もう少し健全なモノの生まれ方、使い方が出てくるような気がするんですよ。

南雲◆少なくとも相手のことをちゃんと考えるとかね。……それって当たり前のことじゃん(笑)

――今回のこの取り組みって、とても「まっとうな」社会活動であり、生産活動だったと思うんです。そこに暮らす人が地域の素材を活用して街をつくり、子ども、つまり未来を育てる。そこにいろんな人の知恵や技能が生かされて、一緒に生きているんだな、ってことを実感できる。考えてみるとすごく当たり前な喜びですよね。

若杉◆そうなんですよ。なんでこう当たり前のことができなかったんだろう、と改めて思います。「まっとうなこと」の力強さってありますよね。

南雲◆なんでできないか、っていうと、日本が病んでいるからだと思うんだよ。どうやったらそれを変えていけるのか、それがスギダラの最も重要な活動だよね。スギで何かをつくろう、ってことじゃないんだよな。

千代田◆スギダラ会員のコメント読むと、日本の林業や杉が抱えている問題に関心がある、っていう人が多いですよ。

南雲◆建築関係の人にとっては、杉はコストダウンのために使うとか、マイナスイメージが強いらしい。杉って真剣に考えるとついつい「難しい」「つらい」ってなっちゃうんだよ。その点、スギダラのいいところはあんまり杉のこと考えてないってことだよね(笑)

一同◆考えてない!!(爆笑)

南雲◆もちろん考えてるけど、どうやったら楽しいか、っていう方向にすぐ行っちゃうじゃない。それが大事なんだよ。杉のことばっかり考えてると、強度や割ればかり気になって何もできなくなっちゃう。

若杉◆そうそう、そのくらいユルい関係、っていうか、許し合う関係がないと、「割れたぞ、責任取れ！」なんて関係じゃとっても無理。

はみ出し者のエネルギーを見よ！

――杉もいろんな問題を抱えてますけど、どこのまちづくりにも日本の病んでる部分がいっぱい出てきていて、うまく行っているところは本当に少ない。その点、今回みたいに地域外の人を入れてここまでやれるケースって珍しいと思うんです。

南雲◆最初に気心の知れた仲間に応援を頼んだのが成功の元だったと思うね。

千代田◆僕らがいたほうが南雲さんノリやすいしね(笑)

南雲◆そうそう。あと、木の芽会の海野さんもキーマンだったよね。ルール無用で行政も民間もなく縦横無尽に自由に動く人だから。

若杉◆僕らも企業の中では枠に納まらない変わりもんと呼ばれてますが(笑)、そういう人って他にもいろんなところにいるもんだなぁ、って気がしましたね。そういう者同士「あ、オマエもか！」っていう……

千代田◆連帯感ー(笑)

南雲◆相乗効果あるよなぁ。はみ出した部分でみんなつながっちゃってさ(笑)

若杉◆勢いがあるんですよ。

千代田◆同じ匂いがするんだ。

若杉◆しかもね、それぞれのはみ出さないところのエネルギーを有効に使うことができるんですよ。

南雲◆はみ出した部分も一見同じようだけど、みんな中身が違ってるわけ。

若杉◆その集積がこういうアウトプットに結びついている気がしますね。

南雲◆枠を越えた部分で動けるのが楽しいし、それを面白いと思った人が同調するんだよ。

若杉◆そういう荒くれ者をまとめる人が登場したり、イベントやモノが出来上がってくると、世の中面白くなって、良くなっていくと思うなぁ。

千代田◆みんなそういうパフォーマンスを持っているんだけど、僕らみたいな者が外から入っていくと、持ち前の

講師

南雲 勝志（ナグモ カツシ）
ナグモデザイン事務所 代表

[略歴]
1956年　新潟県六日市町 生まれ
1976年　東京造形大学 造形学部 室内建築科 卒業
1987年　ナグモデザイン事務所 設立
現在　ナグモデザイン事務所代表、都市環境デザイン会議会員、日本インダストリアルデザイナー協会会員、ICSカレッジオブアーツ講師

[著書]
【デザイン図鑑】+ナグモノガタリ

[主なデザイン分野]
景観、環境プロダクト、家具、照明　等

若杉 浩一（ワカスギ コウイチ）
株式会社 内田洋行　テクニカルデザインセンター

[略歴]
1959年　熊本県天草 生まれ
1984年　九州芸術工科大学 工業設計学科 卒業
1984年　株式会社 内田洋行 入社
現在　デザイン課、企画課、知的生産性開発課を経て、T.D.C（テクニカルデザインセンター）課長

[主なデザイン分野]
プロダクトデザイン

千代田 健一（チヨダ ケンイチ）
株式会社 内田洋行　テクニカルデザインセンター

[略歴]
1964年　福岡県福岡市 生まれ
1988年　九州芸術工科大学 工業設計学科 卒業
現在　環境デザイン研究所、オフィス事業部エンジニアリングセンターを経て、T.D.C（テクニカルデザインセンター）在籍

[主なデザイン分野]
インテリアデザイン

2005年3月某日。内田洋行 潮見オフィスショウルーム内にて。
左から、南雲 勝志さん、千代田 健一さん、若杉 浩一さん。

特別講師

東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤工学専攻 景観研究室
篠原 修　教授
内藤 廣　教授

宮崎大学工学部 土木環境工学科
出口 近士　助教授
吉武 哲信　助教授

実施主体　宮崎県（土木部都市計画課・日向土木事務所）　日向市（市街地開発課）　日向市立富高小学校

協力　日向木の芽会　（株）内田洋行　（有）サイレントオフィス　Office／N　（株）デジタル・アド・サービス+糠谷貴使
ナグモデザイン事務所　内藤廣建築設計事務所　（株）アトリエ74建築都市計画研究所
財団法人 都市づくりパブリックデザインセンター　日向市民の皆さん

発行　2005年3月30日
宮崎県

***1「スギダラ」**
3人が中心となって運営している「日本全国スギダラケ倶楽部」の略。杉の魅力をアピールし、日本中に杉のプロダクツを増やしていこうという運動を展開している。杉の角材を使った巨大テーブルなど、すでにIT関連の企業や大学の研究室などで活躍しているものも多い。

***2「やくざな集団」**
日向市デザイン会議の委員長である篠原修教授率いる都市設計チームのこと。命名したのは内藤廣建築設計事務所の浅野恭子さん。「何かというと徒党を組んで仕事をする」「本流からドロップアウトして渡世している」人々のことを指す。現在、やくざ化の輪は各地に増殖中。

ものを出しやすくなるんじゃないですか？

南雲◆子どもなんか、はみ出したくて仕方ないんだから。

若杉◆自分の適合しない部分をほんのちょっとプルッと出せるきっかけづくり、っていうのは大切かもしれんな。

南雲◆まちづくりがうまく行ってないって話が出たけど、はみ出した部分をどうやって採り入れていこうか、っていうのがないからなんだよね。それはリスクが伴うし、勇気がいるし。

千代田◆今回も最初は県の人も不安いっぱいだったらしいですよ。

南雲◆それをマンパワーで埋めたんだよ。

若杉◆引き合ったんですよ。それこそ「やくざな集団」(*2)が！ たぶんどこにもいるんですよね。それがこれからつながってくるとノッてくるヤツも出てくるでしょう。

南雲◆相手や場合によって、やり方やスタイルが変わってくるだろうね。

千代田◆予算が取れて同じようなことができればいい、っていうだけじゃいけないもんね。ほら、いろんな視点があるじゃないですか。林業とか木材、ってキーワードでくくれることも、今回みたいに教育というフィールドの中でやれることも。だから杉をテーマにしなくても、子どもの成長に必要とされていながら全然足りていない教育ってできると思いますよ。

南雲◆千代田さん、本気で考えているみたいだね。「移動式夢講師」(笑)

若杉◆目覚めちゃったみたいです。

楽しい、って仕事の基本だと思う

――でも、どんなプロジェクトでも「人を育てる」って部分が含まれていると、将来にまでつながりますよね。

南雲◆社会性が出るよね。今回は、子どもに教えるってよりも、いい体験として記憶や身体の中に残ってくれればいい、って思った。それも、ただ街や山を見学するだけじゃなくて、まさにまちづくりのミニチュア版をやって欲しかったんだよ。公共事業では「モノをつくった後、それをどう使うかが実は問題なんだ」ってよく言われるけど、今回も使い方までちゃんと考えてもらうことにした。そこまでセットにすると、「まちづくり課外授業」としては適切な形になるんじゃないか、と一応は考えていたんですよ。

若杉◆素晴らしい！

千代田◆南雲さんが理路整然と言うとすごそうに聞こえますね(笑)

南雲◆それと日向の場合、下地があったんですよ。コーディネーターである篠原先生を中心に、県と市、設計者、そして市民が協力して街をつくっていくんだ、っていうことを何年も続けてきていた。そういう背景があるから今回のことも受け入れられた。なかなかないよ、こんなこと。

千代田◆あのデザイン会議の盛り上がりもすごいですもんね。

南雲◆バーベキューしたりしてね(笑)。やっぱり一緒にやってて楽しいんだよ。楽しいって基本だと思う、仕事するうえで。それも当たり前か。

若杉◆いや、その当たり前のことが、なかなかデザインやプロジェクトの中で生かされないことが多いでしょ。

南雲◆だからどうやったら楽しくできるか、ってのを考えるのはすごく大切なことなんだよ。

ふと思います。

何でこんな事を
もっとやって来なかったんだろうと…
今回はたまたまベストに近いメンバーが
揃ったから出来たんだ。
そう思ったあと、
いや、これは偶然じゃなく必然なんだ。
何かの力がみんなを動かしているんだと
気がつく。
じゃあその力とはなんなのだろう？

人を信用し、信用されるという
人と人の信頼関係。
そんなごくあたりまえのことが、
実はとても大切なことなんだと
改めて気がつきました。